

地方創生と伝統行事 ～土地の記憶を行動で共有する～

③「脚折雨乞」(前編)

上席専門職 平沼 浩

目次

- | | |
|-------------|---------|
| 1. はじめに | 4. 脚折雨乞 |
| 2. 雨乞いとは | 5. 小括 |
| 3. 開催地の環境概要 | |

1. はじめに

前号(No.148)に続き、地域の伝統行事として埼玉県鶴ヶ島市で4年に一度、8月初旬に行われる「脚折雨乞^{すねまひあまてい}」を紹介したい。目的は住民主体による地方創生の一助となるヒントを導くこと、主なキーワードは「住民」、「復活」、「行動」、そして「水の神」の4つである。

江戸時代に始まる「脚折雨乞」の特徴は、焼けるような猛暑の中、昔ながらの手仕事により竹や麦藁等で製作した重量3トン・全長

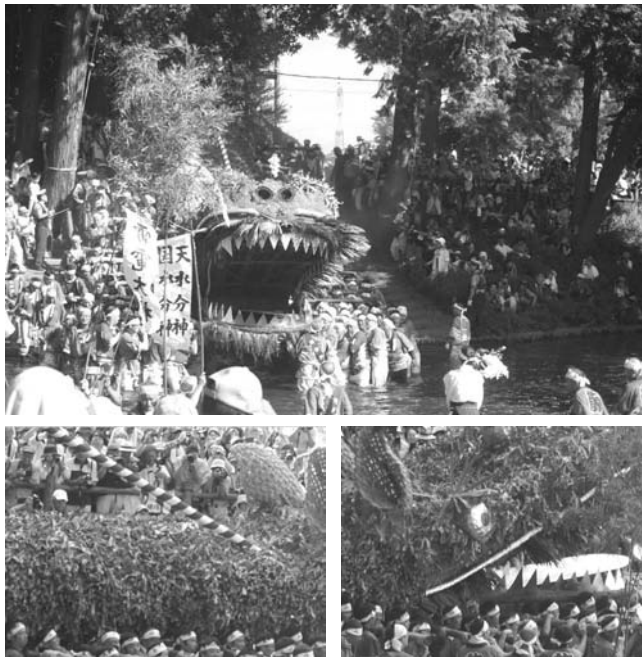
36メートルの巨大な龍神を降臨させ、神・仏・人の総力を結集するところである。その降雨祈願は、天に挑むのでもなく屈するのでもなく、大きな自然の力と人の暮らしに折り合いをつけるように連帯した先人の知恵と逞しさを伝えている。

「雨乞い」というと、成す術のない人の弱さを連想させるが、少なくともこの伝統行事には、人の弱さも惨めさも感じられない。また、表面的にモンスター・スペクタクルの奇祭と捉えるのは間違いのようだ。

2. 雨乞いとは

早魃は作物の生産循環を狂わす一大事であり、近世まで互恵的に備荒作物を貸出す義倉の仕組みがあったにせよ、深刻な現実問題であったはずである。殊に夏場に旱^{ひでり}が生じやすい環境においては尚更である。また、今でも空模様を「天候」と呼ぶように、降雨の次第は、人智を超えた現実である。水を治める事柄の重大さと切実さは、政治の「治」という文字にも表れている。

一方、今日のように巨大ダムが建設され、河川や灌漑の整備が進み、水道が完備し、自販機やコンビニで飲み物が自由に手に入る環



境にいと、水の有難味と同様に雨乞いの意味もイメージしにくくなっている。

雨乞いは、「降雨を願って行われる儀礼の総称」などと説明される。つまり、一口に「雨乞い」といっても内容は様々ということである。本題に入る前に、そもそも雨乞いとは、どのようなものだったのか。また、人の切なる願いを汲み取った水神とは、どのようなものか。手掛かりとして、『日本民俗大辞典』から要点を抜粋してみる。

【雨乞い】

○政治としての雨乞い

古代以来、朝廷・幕府はたびたび諸社へ奉幣し、仏僧に祈雨の法を修せしめて国家規模の雨乞いを行った。村落にあっても雨乞いは重要な共同祈願の行事で、各戸の参加が義務づけられていた。

○民間で行われた雨乞いの代表例

- ①村人が山または神社に籠って祈願する。
- ②作り物の竜や神輿・仏像を水辺に遷して祈る。
- ③特別の面（雨乞い面）を出して祈る。
- ④大勢で千回・一万回の水垢離みずごりをとる。
- ⑤水神のすむという池などをさらって水替えをする。
- ⑥水神の池や淵の水をかき回す。
- ⑦水神の池や淵に牛馬の首など不浄なものを投げ込む、あるいは汚物を洗う。
- ⑧地蔵を水に漬ける。
- ⑨釣り鐘を川や池に沈める。
- ⑩太鼓を打って総出で雨乞い踊りを踊る。
- ⑪特定の聖地から代参が水種をうけてきて川や田に注ぐ。
- ⑫山に上がって大火を焚く（千駄焚き）。

○集団的興奮と祈願の切実さ

雨乞いにはしばしば共同飲食が伴い、また大規模な雨乞いは集団的興奮をも引き起こして、祭礼に似た状態を現出させた。若者や

奉公人には雨乞いも楽しみの一つであった。

しかし、雨乞いが祭礼と大きく異なるのは、一つの雨乞い儀礼が奏功しなかった場合、別の儀礼がかさねて執行される点で、その内容と規模は徐々に拡大してゆく傾向があった。そこにこの祈願の切実さをみることができる。

【水神】

水神は具象的にはしばしば蛇神の姿をとる。竜蛇を水神とみなす考えは雨乞い神事などにもみられる。水神は蛇のほかにも、鰻・魚・クモなどの姿をとるとされる場合もある。

【竜神信仰】

古代中国の観念上の霊獣である竜をめぐる信仰。竜神信仰の基底には蛇神信仰があるとする見方が一般的である。日本の竜神信仰は竜王・竜宮の神・八大竜王・竜神などの呼び方でほぼ全国的にみられる。

また、雨乞いを竜神が棲むとされる淵や沼で行うのは全国的にみられる。水神としての竜神は雷神信仰とも結びつき、竜巻とともに天にのぼると考えられることもある。

『日本民俗大辞典』が参考文献にあげる高谷重夫『雨乞習俗の研究』、同『雨の神 一信仰と伝説一』によると、民間で行われた雨乞いには仏僧や山伏の動員、雨壺を使う例、また、女性が女人禁制地に立ち入る例や女相撲のように女性が前面に立つ雨乞事例もあり、そのバリエーションは上記①～⑫の民間雨乞い代表例に尽きない。

このように多種多彩な雨乞事例の中で、「脚折雨乞」の態様は、後でみるように上記12の代表例のうち物理的な実施条件が適さない⑨⑫を除くと、実に10の代表例のうち半分が当てはまる(①②⑥⑪、音を鳴らす点で⑩)。

3. 開催地の環境概要

開催地は、埼玉県のほぼ中央に位置する鶴ヶ島市である。昭和35（1960）年に約7千人だった人口は、現在約7万人である。その昔、小江戸と呼ばれた川越市に隣接し、県都さいたま市をはじめ東京都心にも電車で40～50分の通勤圏にある。また、市内に関越自動車道と首都圏中央連絡自動車道（圏央道）を結ぶ鶴ヶ島ジャンクション・インターチェンジもあり、自動車利用の利便性も高い環境にある。この町を一言でいえば、高度経済成長期以降に人口が10倍に増加したベッドタウンである。

同市の街並みは、平坦地が続く入間台地の北部寄りに広がる。遠く西方に秩父連山が見えるほかは高層建物も少ないせいか、空は広々としている。その台地を囲むように荒川支流の入間川と高麗川が隣接市内を流れている。『鶴ヶ島町史（原始・古代・中世編）』（1991）の環境解説によれば、その台地の下には地下水を水源とした湧水帯があり、湧水池からの流れが小河川に注いだという。

行事名称は、脚折^{すねまじり}という地名に由来する。鶴ヶ島市・鶴ヶ島町の前身である鶴ヶ島村を構成した12村2新田の中核が脚折村であり、現在も脚折地区は市の中心部に位置している。この地名の初見は、戦国大名の小田原北条氏が、伊豆半島と現在の埼玉・東京・神奈川の3都県域を勢力下に置き、永禄2（1559）年に作成した『小田原衆所領役帳』である。

江戸時代の所領関係は、川越藩領に始まり幕府直轄地や旗本領を経て、幕末には直轄地と旗本領が村内に併存した。幕府が天保元（1830）年に編纂した『新編武蔵風土記稿』は、近世後半の脚折村の農環境を次のように記している。

「地形平坦ニテ土性ハ赤野土ナリ 水田少ク 陸田多シ 用水ハ西ノ方高倉村ノ溜井ヨリ

ヒケリ又村内ノ溜井ヨリモ沃ケリ ママ早損ヲ患レトモ水損ノ害ナシ」（下線筆者）

「水田は少なく陸田（畑）が多い」という環境で「時々、旱の損害に患える」ということは、雨乞いの背景作物は主に畑の産物だったことになる。地元の人に聞くと、かつて農村だった頃の畑の産物は、もっぱら陸稲や麦だったそうだ。

見落とせないのは、江戸幕府の調査官が、わざわざ「(されども) 水損の害なし」と付け加えていることである。これを裏返せば、他の地域では河川氾濫が深刻な問題だったことを物語る。雨乞いの一面だけを捉えて、現代人の感覚で「雨乞い＝辛い生活環境」と決め付けるのは早計かもしれない。なお、文中の「溜井」は、本来の「井」の意味は取水地であることから、湧水池を指すと考えられる。

さて、「脚折雨乞」のメイン会場は、古くから脚折地区の貴重な湧水池だった「雷電池^{かんだちがいけ}」である。面積はおよそ25mプール三分程、水深70cm程の池である。新興の住宅地と茶畑に囲まれた児童公園の敷地内にあり、公園は「雷電池公園」の名で親しまれている。平素は静かで人影もまばらな児童公園が、本番当日には身動きが取れないほどの人であふれ、熱気に包まれる。強い日差しが照りつける8月の猛暑の中、大勢の見物人に見守られながら、約300人の男達により、巨大な龍神が、雷電池の荒ぶる神となる。



「雷電池」と書いて「かんだちがいけ」という

4. 脚折雨乞

「脚折雨乞」は、昭和39（1964）年を最後に一旦その伝統に幕を下ろすが、昭和51（1976）年に復活を遂げ、以降は4年に一度、夏季五輪の年に開催されている。農地は縮小し水への心配も薄れた今日、元来農村の降雨神事だった雨乞いの意義は、地域の無形文化の継承を通じた住民相互の親睦行事として再生し、現在は鶴ヶ島市を代表する伝統行事となっている。リオ五輪開催年の平成28（2016）年は、8月7日（日）に盛大に執り行われた。

(1) 準備から本番当日の概要

4年に一度とはいえ、手作りの伝統行事を再生し続けるには、多くの人手と協力関係が必

要となる。運営を支えるのは、昭和50（1975）年に結成された「脚折雨乞行事保存会」である。同保存会の組織基盤は、9つの自治会、自治会加入世帯2,080戸だが、このうち農家は1割程度、大半はIターンの新住民である。今回主催者発表の関係スタッフの総数は、龍神の担ぎ手約300人を含めて952人とのことだった。

一般に御神輿の運行を渡御というが、地元では龍神を担いで雷電池まで運行することを「龍神渡御」と呼んでいる。龍神は単なる美称を超えて神格に高められ、かつて水神が棲んでいたという雷電池に向かう。

地元で龍蛇と呼ばれる龍神の依代の製作を含め、準備から本番当日の概要を表にまとめてみた。

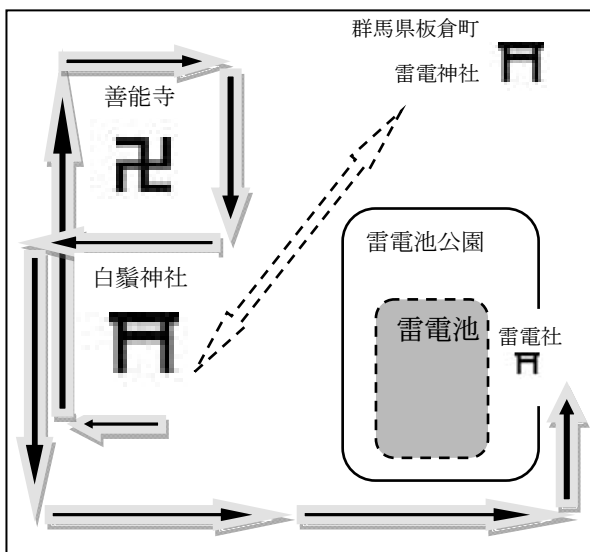
表 準備から本番当日の概要

	日程	主な項目
事前準備	前年から	・脚折雨乞行事保存会の協議 ・保存会メンバーによる麦の栽培（材料の麦藁を確保） ・市や所轄署との調整
	1週間前	・龍蛇製作。白鬚神社で早朝から約280人参加
	前日	・群馬県板倉町の雷電神社に祈願「戴水の儀」（御神水拝受） （代参するメンバーは、御神水を伝統に則り竹筒で持ち帰る）
	当日午前	・龍蛇製作の総仕上げ ・受付・誘導・整理・駐車場等の各係は各持ち場へ
龍神降臨	当日昼頃	・白鬚神社宮司による参加者の修祓・祝詞 ・白鬚神社宮司による龍蛇への「入魂の儀」（龍蛇は龍神へ） ・住民代表による龍神への「御水献水の儀」（御神水を龍神に） ・鏡開きにつき、雷鳴を連想させる龍神太鼓
龍神渡御	1時頃～	・約300人の龍神渡御の団は約2kmの道のりに出発 道中、山伏装束の善能寺副住職を含め6人の法螺貝が鳴る 道中、棒で担いで運ばれる大太鼓が鳴る 道中、水神・雷神・風神10柱の書かれた神旗6竿がはためく ・途中、善能寺で住職による龍神への祈祷 休憩を挟み、団は通行量の多い国道407号を横断し雷電池へ
雷電池雨乞	3時頃～	雷電池公園到着・休憩 ・公園内の雷電社で白鬚神社宮司による修祓・祝詞
	3時半～	・雷電池に対し白鬚神社宮司による修祓 ・雷電池に対し善能寺副住職による祈祷 ・雷電池に対し住民代表による「御水献注の儀」
	4時頃～ 4時半頃	・龍神の雷電池入水 ・唱え言が唱和され、龍神は時計回りに計5回渦を巻く ・号令一下、龍神は担ぎ手に一気に解体され昇天する

「脚折雨乞」は、行事の流れからも分かるとおり、神・仏・人の総力を注いだ先人の行動を伝統行事のかたちで再現している。また、善能寺副住職の山伏装束は、明治5（1872）年の修験禁止令まで修験者も動員対象だったことを偲ばせる再現である。

下図は、行事の重要拠点と龍神渡御のルートを簡略化したイメージ図である。

図 重要拠点と龍神渡御ルートのイメージ



(2) 龍蛇の製作

龍蛇の製作場所は、脚折地区鎮守の白鬚神社である。本番前週の7月30日（土）は、早朝から年齢も職業も異なる約280人が参集した。

古くは善能寺（安養山蓮華院善能寺）が製作場所だったようだ。また、かつては、村人協議により「明日決行」が決議されると翌午前中に一気に完成させた時代もあったが、現在は参加者の大半がサラリーマンであることから作業を前週に集中させているという。

主に男性陣は、作業着やジャージ姿で各持ち場の製作を分業し、女性陣は頭にバンダナ、龍神がデザインされた濃紺のTシャツ姿で立ち働いていた。猛暑の中で作業にあたる参加者へ、また取材者や見学者にも水分補給の心遣いがあり、境内の集会所では参加者の昼食

用意が進行していた。作業の手の空いたときのお喋りもまた、人の交流である。

製作作業を本番前週（7月30日）と本番当日（8月7日）の総仕上げに分けて、各パートの材料と手仕事の概要を紹介する。

【本番前週の製作】

ア. 骨組み

骨組みには、孟宗竹等70～80本が用いられる。竹は事前に地元の竹林から切出して用意される。縦に長く伸びる胴体の背骨に、また横に通す担ぎ手部分に、頭部上顎にと、用途に応じて長さ太さが使い分けられる。

イ. 組立てと結束

組立ては、完成後に人が担ぐ想定で、持ち運び可能な腰の高さほどの架台と三脚の上で組み立てられる。龍神渡御の途中休憩でも、この架台と三脚は必需品となる。

竹の骨組みを繋ぐのは、大量の縄と縄の結束技術である。全長36メートルの龍神の躰が街角を左右90度に蛇行しても、雷電池で荒ぶる神として渦巻いても簡単には壊れない。また、大きく口を開けた上顎の傾斜は、茅葺屋根の工法の応用である。

注目したいのは、龍神解体後の撤収を見越した設計思想が背景にある点である。壊れにくく、かつ解体を容易にしているのである。

ウ. 頭部と胴体の肉

頭部と胴体には、麦藁250束が用いられる。1束の周径はバケツほどの大きさがあり、トラックで何度も運び込まれた。

農村だった頃は、参加者の麦藁持参が基本だったが、現在はまとまった麦藁が入手できないため、前年から保存会で6,000坪（約2ha）の畑を借りて麦を育てている。11月の種蒔き、冬の麦踏み、6月初旬頃の刈入・脱穀・切干し等、一貫して保存会メンバーで分担する。

エ. 顔周辺

目 まず竹を細く裂き、竹籠を編む技術を

応用してバスケットボール大の半球を作る。それに半紙を貼り黒く着色する。黒目の輪郭に銀紙や金紙を貼る。出来た目玉の周囲に厚く麦藁を巻き肉感を出す。

鼻 まず鼻孔部分を竹細工の技術の応用で製作して赤く塗る。それを核にして周囲に分厚く麦藁を巻き、ボリューム感のある鼻に仕上げる。

耳 稲藁から縄を緬い、その縄を編み上げて貝殻のような窪みと尖りのある耳の形に仕上げる。立てると身の丈を超える。

鬚 稲藁を編み上げて5メートル程の太く長い縄を作り、銀紙を巻いて仕上げる。

舌 ベニヤ板をカットして舌の形を作り、赤く着色する。口内も赤く着色する。

歯 ベニヤ板をカットしてギザギザの歯を作り、銀紙を貼る。牙には金紙を貼る。

角 長い竹に紅白の布を巻き上げるように貼る。

オ. 特別なシンボル

宝珠 目と同様に竹籠を編む技術の応用で、上部先端が尖った玉葱形を作る。その上に半紙を貼り、上から金紙を貼る。

尻剣 厚板をカットして大振り古代の^{つるぎ}剣の形を作り、銀色に塗装する。

神社の境内では、黙々と手仕事に集中する人もいれば、「昔の人は大したもんだね。何でもこうして作ったんだから」といった明るい会話も聞こえてくる。顔周辺部位の製作者は、左右対称のバランスが気になるようで、形が見えてくるにつれ仲間同士の相談頻度が高まる。特に、稲藁を編み込んで作る大きな耳は、簡単に修正がきかないようで、若手と元気老人が相談を繰り返していた。

マイペースで作業を進める「宝珠」の製作者によると、特段の設計図やマニュアルがあるわけではなく、昔の流儀で大まかに共有されたイメージと段取りで作るのだそうだ。

「同じように作っているつもりでも、出来上りの顔つきは、不思議と毎回違う」という余裕の言葉から、出来栄の幅は織り込み済みのようだ。誰も規格化された複製を目指している様子はない。イメージを踏襲した最終の出来上がりだが、その年の龍蛇なのだろう。

「宝珠」の製作者は、大先輩の時代の話聞かせてくれた。「昔の人は雷電池で解体後は、日用の資材として喜んで持ち帰ったそうだ。これ全部日用資材の応用だから。特に竹細工で作る鼻孔部分は、重宝な赤い小物入れとして人気があったそうだ」。



下は市役所ホールに展示されていた鼻と宝珠

【本番当日の総仕上げ】

ア. 耳・角・髭

サイズの大きい部位を頭部に取り付ける。

イ. 眉毛・口髭

眉毛に見立てて差し込む棕櫚しゅろの葉は、長い睫毛のように目玉を際立たせる。赤い唇の回りにも口髭として棕櫚の葉を差し込む。

ウ. 胴体の鱗

胴体を覆うように、緑色の鱗に見立てて、葉色が美しい隈笹くまざさを刺し込む。

エ. 特別なシンボル

「宝珠」は両目と鼻の中心あたりに取り付ける。「尻剣」は、人が持って歩く想定で尻尾と紅白の紐で結ばれる。また、鼻には神社が用意する「紙垂」を付けた木が立てられる。

こうして、目・鼻・口程度の茶色い巨大な蛇は、威厳と野性味と神聖さが加えられて龍蛇に変わる。龍蛇という呼び方も造形とシンボルを思えば納得できる。

造形上、頭部は見慣れた龍だが、胴体は龍にあるはずの手足も背鱗も無い大蛇である。

シンボルの点では、頭部の「宝珠」は、仏教の龍につきものの宝である。一方、尻尾の「尻剣」は、日本神話でスサノオノミコトが八岐大蛇やまのあめを退治して、その尻尾から獲得する天叢雲劍あめのみつらぎ（別名草薙劍くさなぎのみつらぎ）を彷彿とさせる。やはり、胴体は大蛇である。そして、鼻には神社の注連縄しめなわに垂らされるのと同様の「紙垂」を付けた木が立てられ、神聖さを高めている。

まさに、龍蛇は、雷電池に棲んでいた伝説の大蛇だいじょうをベースに、日本神話の大蛇おろちと仏教の龍が習合した聖獣なのである。

龍蛇製作は雨乞行事の準備の一部だが、この工程だけでも、脚折の先人が遺した4つの無形文化の知財が含まれているように思われる。そして、これらは、今も日常で応用が試される基礎的な人の力ではないだろうか。

- ① 身近な材料で創意工夫する手仕事の力
- ② 意味を与えて繋ぐ豊かで柔軟な想像力
- ③ 分業と連帯で大きくなる人の力
- ④ 事後（解体）を見通す冷静な構想力

(3) 板倉雷電神社への道

本番前日、保存会のメンバー数人は、群馬県ぐんま邑楽郡板倉町いたくらの雷電神社らいでんに代参し、「戴水の儀たいすい」により池の水を御神水として拝領する。

板倉雷電神社は、関東一円、特に利根川中上流域に点在する雷電神社の総本宮である。

現在、その往復に自動車を利用しているが、かつては、村人協議により「明日決行」が決議されると、すぐに片道40km以上ある板倉雷電神社へ降雨祈願に向かい、駅伝方式で御神水の入った竹筒を当日午前中までに持ち帰った。条件の悪い夜道を月明りだけを頼りに、若者たちが往復80km以上走ったのである。

鶴ヶ島市教育委員会が平成12（2000）年の辰年にまとめた『脚折・雨乞』および翌年の巳年にまとめた『脚折の雨乞い』によると、この御神水が文献に登場するのは、明治8（1875）年頃作成の『村誌編輯』に記録された明治7（1874）年の早魃時である。また、同史料は伝承として、寛永（1624～44）年間の雷電池を縮小する水田開発で、昔から池に棲んでいた大蛇が上州板倉の雷電の池に移り棲んでしまい、それが雨乞いの靈験の滅殺理由とされていたことを伝えている。

板倉雷電神社への道は、徒歩が自転車に変わり、自動車に変わっても、かつて夜道を走った若者達への敬意とともに語り継がれている。

同神社の立地は、利根川と渡良瀬川に挟まれた河川流域である。明治34（1901）年出版の『上野名跡図誌』は、脚折の雷電池から大蛇が移り棲んだとされた板倉湖と、そこに浮島のように存在する同神社の姿を伝えている。落雷の頻発地域らしく、現在も同神社の厄除祈願の筆頭は、雷除けである。



明治期の雷電神社。板倉町文化財資料館の展示より

(4) 龍神渡御と龍神昇天

鶴ヶ島市のホームページに動画も掲載されているので、ここでは注目点だけを記す。

まず装束。白い鉢巻は古い写真にもある。水色の法被は、昭和63（1988）年からで、裾面の絵柄は沸き立つ水しぶき、背中には「祭」ではなく「龍」の文字がデザインされている。これは、保存会の名称が「祭保存会」でなく「行事保存会」であることに通じる。

強い日照で隈笹の鱗も縮れ始めた龍神は、雷電池を時計回りに3回渦を巻き、さらに2回渦を巻く。法螺貝が鳴り、神旗がはためく。

最後に総指揮者の号令が響くと、麦の種蒔きに始まり、大勢の手を介して作られ、運ばれ、思いを込められた龍神は、一気に解体されて姿を消す。それまでの全プロセスが、この一瞬のための序章であったかのような壮大な幕切れとともに、龍神は昇天する。

5. 小括

「脚折雨乞」には、人の弱さや惨めさが感じられない。たとえば、雨乞いの最後は、天へ見えない橋でも架けるように龍神を昇天させ、それでサッと終わる。また、記録上、執行年の複数回実施は一度も無い。

厳しい状況を前にしながら、不思議なほど潔い。その様子は、まるで「徳」を積む如く、旱がもたらす不安や焦燥等を汗と一緒に祓い落しているかのようなのだ。こうした潔さも先人

が遺した無形文化の一つといえるだろう。

「脚折雨乞」は、大きな自然の力と人の暮らしの間にある矛盾に折り合いをつける洗練された知恵の行動だったのではないだろうか。

これには打って付けの参考材料がある。民俗学者レヴィ＝ストロースが人類の普遍的思考能力であるとした「野生の思考」である。人類学者の中沢新一が、NHK「100分de名著」の主題として分かりやすく解説している。

「野生の思考」の特徴は、ありあわせの道具や材料を用いて自分の手でフレキシブルなものをつくる「ブリコラージュ（器用仕事）」、その応用で現象を比喩的に捉えて体系化する「神話」や「呪術」の創造。そして、神話は哲学の母体であり、呪術的思考は科学的思考の母体と捉える。「野生の思考」と、それを母体として生まれた「科学的思考」の差異は、前者は揺らぎのある「記号（隠喩）」を用いるのに対して、後者は均質な「概念」を用いる点にあるが、知的操作の性質自体に違いがあるわけではなく、適用される現象のタイプが違うに過ぎない。この二つの思考法に優劣はなく並置されるべきで、用い方のバランスが重要だと。また、レヴィ＝ストロースは、近代以降の文明社会が「科学的思考」一辺倒の閉塞感に陥るなか、この二つの思考法を上手く使うことに長けた日本文化に注目した。

今回は、対象を面に拡大して考察する。

【参考文献】

- ・鶴ヶ島市ホームページ
- ・福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄『日本民俗大辞典 上・下』吉川弘文館・1999・2000年
- ・高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局・1982年
- ・同『雨の神 ―信仰と伝説―』民俗民芸双書94・岩崎美術社・1984年
- ・『鶴ヶ島町史（原始・古代・中世編）』1991年
- ・杉山博『小田原衆所領役帳』近藤出版社・1969年
- ・林述斎『新編武蔵風土記稿六』歴史図書社・1969年
- ・鶴ヶ島市教育委員会『脚折・雨乞』2000年、同『脚折の雨乞い』2001年
- ・中沢新一「100分de名著」『野生の思考 レヴィ＝ストロース』NHK出版・2016年